

りなおして宿題に集中する。

そうしてしばらく問題を解いてから、そろそろ帰っても平気な時間かな、と思つて鉛筆を止めた。それからぼくは無意識に、ケータイで時間をたしかめようとポケットの中をさぐり、そこになにもないことを思いだしてはつとした。「そっか、ケータイは……」

小さくつぶやいた瞬間、宿題をしている間は忘れていられたもやもやが、ぼくの胸にもどってきた。

……ライネ、怒つてないだろうか。ぼくが勝手にケータイを、家来の宇宙人さんにわたしてしまったことを。

いや、ただど命の危険があるなんて言われたらわたさなわけにはいかない。それに本人も、最後は帰りがつていたわけだし。だいたいあんなわがままな王子様のことなんか、もう気にすることないじゃないか。

自分にそう言い聞かせて、学習室の壁時計に目をやると、窓の向こうに灰色の空が見えた。昨日の帰り道と同じ、暗い灰色の空。

その空を見てぼくはふと、ライネと知りあってからまだ一日しかたつていなかったんだな、と思つた。なぜだかもつとずっと長い時間、いっしょにいたような気がしていた。からっぽになったポケットの中身を、もういちどたしかめているうちに、ぼくは胸のもやもやが寂しさに変わるのを感じた。さよならも言わずに別れてしまったんだ、と思

つた。ライネは遠い星の王子様で、もう二度と会うこともできないかもしれないのに。

そんなふうにも思いつながら空をながめていると、ケータイの画面越しに見たライネの顔が、次々と頭に浮かんできた。時代劇風のあいさつをしてきたときの得意そうな顔、ライプに連れていってくれと頼んできたときの真剣な顔、おみやげを山ほど装備してはしゃいでいたときの顔、ライプのあとで見ただんよりした顔。

ぼくはため息をいっしょに、その顔を頭から振り払つた。もう塾も終わる時間だ。そろそろ家に帰ろうと、ぼくは宿題の問題集をカバンにしまった。そのとき、カバンの底でくしゃつという音が聞こえた。

音をたてたのは、人形焼がはいっていた紙袋だった。浅草でライネにすすめられて買った、あの人形焼の紙袋だ。くしゃくしゃのその紙袋にふれた瞬間、人形焼の甘い味が口の中によみがえって、ぼくは胸が苦しくなった。

あんなふうにともだちと遠くに出かけて、いろいろな場所を見てまわって買い食いまでするなんて、本当にはじめてのことだった。ライネといっしょに浅草の街をまわりながら、ぼくはたしかにたのしいと思つていた。ライネはわがままでマイペースだけど、それでもいっしょにいたのしかなかった。そう、ぼくは決して、ライネのことが嫌いじゃなかったんだ。